8％増で17年度売上高315億

FEIC 機能製品へのシフトさらに

古河電工産業電線（＝FEIC、本社・東京都荒川区東日暮里、松本康一郎社長）は、機能製品の堅調や汎用電線の需要回復などで、17年度売上高315億円を見込んでいる。前年度比は8％増。営業利益は横ばいとしている。16年度売上高は、前年度を5％下回り、営業利益は機能製品の売り上げ増や生産効率化で約4倍増。同社は機能製品の売上高比率をさらに伸ばす方針。

FEICの17年度売上高は、機能製品が堅調を維持。汎用電線の需要回復も予想されることから315億円で16年度を8％上回る。出荷銅量は5％増の約2万8千トンの見込み。

営業利益は16年度が大幅に伸びたこともあり、ほぼ横ばいとの見方。ただ、付加価値の高い機能製品の伸びが高いことから「計画を上回る可能性もある」（松本社長）。

同社では、汎用電線から機能製品へのシフトに力を入れている。中期経営計画スタート時の15年度の汎用電線の売上高比率は53％だが、開発チームを中心に新製品開発に注力。中計最終年の20年度には、機能製品の比率を52％に引き上げる計画。このため、毎年新製品創出に取り組んでいる。

松本　康一郎社長

新製品開発では、古河エレコムなどグループ会社との連携もより緊密化。ユーザーのニーズ把握に注力しており、セパレータ省略タイプの盤内・機器内配線用絶縁電線「EM－LMFC（ノンハロゲン難燃・可とう性架橋ポリエチレン電線）」などを開発。さらに、銅とアルミの融合により超軽量化ビル用ハーネスケーブル「ハイブリッドBH」などの販売も伸ばしていく。

16年度売上高は、需要停滞や銅価下落もあり、当初計画時から慎重な見方だったが、予想売上高327億円を下回り290億円だった。前年度比は5％減。銅量は同等だったが、銅価安値が響いた。また、機能製品の売上高は4％増（銅量7％増）だったが、汎用電線が13％減（同3％減）だったため減収となった。

営業利益は、高付加価値製品の売上高が伸び、平塚、九州工場の効率化が進み約4倍増で過去最高を更新した。引き続き各工場とも毎年5～10％程度の効率化に取り組む（同社長）方針。

16年度の営業利益は、最近8年間での過去最高だったが、15年6月に松本社長が就任以来、進めている高付加価値化へのシフトが功を奏したことによる。

FEICは、古河電工グループの汎用電線の中心メーカー。同社製品は汎用電線はグループ会社の古河エレコム、それ以外の製品は同じく古河産業が販売している。同社にはマーケティングや戦略営業部が残されており、マーケティングでもグループ会社との学習会などで連携強化を進めている。